書評

李慶著『日本漢学史』（三巻）

小川晴久

一、本書の構成と性格

私が本書評欄でとりあげる作品は、中国の学者李慶氏が十年以上の歳月を費やした出版にこぎつけた大冊『日本漢学史』壱、弐、参の三冊である。上海外語教育出版者から二〇〇二年七月、二〇〇四年三月、二〇〇四年六月と各二一〇〇部出版されている。三冊の副題と取り扱っている時代と分量を左に示そう。

『日本漢学史』（第一部）起源和確立（一八六七～一九一八）六〇八頁

『日本漢学史』（第二部）成熟和迷途（一九一九～一九四五）五八三頁

『日本漢学史』（第三部）転折和発展（一九四五～一九七一）八七三頁

各巻とも、国際情勢、国際漢学、中国と日本の学術交流の叙述のあとに、史学、思想・哲学・宗教、文学、言語学・芸術史の各分野に分け、日本人の中国学の概況が代表的人物毎に紹介されていき、各巻の最後には、その時代の代表的論争が三つないし二つとりあげられている。とりあげられた論争名も、ここに紹介しておこう。

第一部（1）漢字改革に関して（2）堯舜抹殺論（3）『支那論』論争に関して

第二部（1）中国観論争（2）漢学政策論争（3）天文学と中国古代典籍論争

第三部（1）中国歴史時期区分論争（2）中国資本主義萌芽問題

以上からわかることは、本書は日本の近現代の中国学の紹介である。『日本の近現代の中国学』と言い換えれば、本書の性格は一目瞭然である。

本誌の名は『日本漢文学研究』である。本誌の使命は日本漢文学とは何かを内容に即して論じ、その存在意義を証明していくところにあると考える。とりわけ日本漢文学の領域が多岐にわたっており、歴史的事情によってその観念が稀薄になってきているので、それを明確にしていくことから本誌の役割は始まるであろう。したがって本誌が書評にとりあげるものもこの使命に役立つものでなければならない。本誌の課題に照らして本書をとりあげることは根拠があるか。本書は本誌の課題を解く上で役に立つ書物であるか。答えは一見ノーでありながら、イエスである。

二、日本漢文学（日本漢学）評価の逆証明

日本漢文学（日本漢学）を漢文訓読法（日本の語順に置きかえる手法）を駆使した中国の詩文の理解や漢詩文の創作を考えたとき、つまり日本語と日本文化の一ジャンルを考えるとき、本書の題名と内容の『日本漢学史』はこれに当たらない。日本人による中国研究である後者（本書）は、中国研究、中国理解にアクセントがあるのであり、本書で欧米の中国研究が国際漢学と称されていることからも、本書の題名と内容は『日本の漢学史』であって、『日本漢学の（歴）史』ではない。フランスの漢学（中国学）はフランス語やフランス文化の一ジャンルではない。日本や韓国はたまたま中国と同じ漢字を使っているために、中国の詩文の学と摸倣は、中国学であると同時にその国の文化の一ジャンルともなる。日本や韓国で漢文学や漢学というとき、強い二重性を帯びざるを得ず、外国研究としての中国学が発展すればするほど、両者の違いが意識されてくる。

本書を一見したとき、本書は日本漢文学（日本漢学）解明には余り役に立たないなと思ったのはこれによる。

しかしよく考えてみると、狭義の日本漢文学（日本漢学）も中国の詩文の理解という側面はあるのだから、日本人による中国理解の側面をもつ。そのいみでは本書と本誌の課題解明とは関わりがあるのである。

私は本書の著者李慶氏に次の点を感謝したい。よくぞ日本人の中国研究の全体をここまで叙述して下さったことよ。日本人でもできないことを、あろうことか自国文化に自足しがちな中国人が果たして下さったことを高く評価したい。

私ならずとも本書から日本人は多くのことを学ぶことができるからである。戦前までの第一部と第二部から（自分の生まれた前の時代から）沢山のことを学んだこと、また学閥、派閥、イデオロギー別の意識が私の中にあってあえて見ようとしない、知ろうとしなかった人物や研究者の業績が、本書では平等に詳細に記されている。

日本の近現代には、こんなに沢山の中国研究者がいて、これほどまでの中国研究がなされていたのかと読者は読みおえて、ある感銘を覚える。

何よりも感謝したいのは、著者が日本の中国研究を高く評価してくれたこと、それを自国民（中国人）に具体的に知らせようと、十年の歳月とすべて自費で、二〇〇万字もの原稿を作成された壮挙に対してである。

李慶氏は日本の中国研究を次のように評価して下さっている。

一、非常に資料を重視すること。具体的に言えば、①語学の能力の養成と原書の読解講究の重視。たしかな業績をあげている日本の中国学者の漢文や中国文献理解の水準は高い。また欧米の語学にも通じ、世界の中国学の研究成果を利用している。②日本所蔵の他国にない貴重な資料の活用。公共機関以外の大量の寺院や故人所蔵の書籍の

活用。③新発見の資料への関心の高さと学界の反応の早さ。

二、欧米の視点を使って研究対象に分析を加え、切り込むことにたけている。古くは中国社会停滞論、中国文化外来論、のちには水利史観、征服王朝論、世俗化理論、文化衝突論など。

三、具体的問題に十分な資料の収集をし、研究を行なう。少なからざる具体的問題で出色の成果をあげていること。

四、大量の目録や索引、辞典、影印資料など工具書類の活用を重視する。

五、近代の日本の中国学には地域の特色が顕著。各地の学派、団体、師弟関係が研究の展開に大きな影響をもつ。

このように日本の中国研究が評価されるのは、うれしいことである。しかも中国の学者によって。これは日本人に大きな自信を与えてくれる。

このことは狭義の日本漢文学、日本漢学の理解にある大きな示唆を与えてくれる。たとえそれが日本式（漢文訓読による）の中に中国文化理解であったとしても（たとえば江戸時代の日本人による儒教理解）、その成果に自信をもっていいことである。漢字と漢字文化にある普遍性があるのであれば、それを駆使した作品に、本場（御本家）の中国にもひけをとらぬ質の高いものがありうる可能性がある。私は江戸時代の儒教理解に日本人は中国や朝鮮にもない深い理解と独自の貢献をしたと考えるものであるが（中江藤樹の孝理解、伊藤仁斎や貝原益軒の仁理解、町人石田梅岩の性理学理解など）、本書の高い日本中国学評価はある自信を与えてくれる。

三、新旧学術思想・研究方法の衝突

著者は日本の近代中国学の確立期を日清戦争直後の一八九五年から第一次世界大戦終了の一九一八年の時期としているが、その直前の一八八〇（明治一三）年から一八九三（明治二六）年の間に二つの大きな論争があったことを重視し、それを通して日本近代の中国学の新しい研究思想と方法が準備されたと見た。

一つは重野安繹（一八二七～一九一〇）、久米邦武（一八三九～一九三一）が引き起こした赤穂義士、児島高徳および上古祭神風俗論争であり、今一つは那珂通世「日本上古年代考」に関する論争である。

重野は一八八九年『赤穂義士実話』を出版し、四十七人の事実を考証した。重野はまた『太平記』中で活躍し、忠臣の見本とされてきた児島高徳は実在しない架空の人物であることを「児島高徳考」（一八九〇年）で発表した。とくに後者は強烈な反発を招き、重野は「抹殺博士」と称された。

この実証を基礎とする理性的態度とも関わって、久米邦武は一八九一（明治二四）年、「神道は祭天の古俗」（『史学会雑誌』二三～二五）という論文を発表し、神道家たちの激烈な反撃にあって、ついに東京帝国大学の教授を辞職させられた。

那珂通世がまき起こした論争は『三国志・魏志』に出る卑弥呼の記載と『日本書紀』中の神功皇后の記載に百年以上の差があり、神功皇后は卑弥呼であるのか否か、邪馬台国はどこに存在したかを提起したところから発生した（初回の提起は一八七八年、二度目は一八八八年）。欧州留学帰りの三宅米吉が創刊した『文』（第一巻、第八・九号）という雑誌に掲載された第二次発表後、この雑誌で熱烈な討論が展開されたという。中村正直、久米邦武、津田直道、末松謙澄、西村茂樹、星野恒、加藤弘之ら二十余人が回答を寄せ、一大論争を呈した。

これらは一見中国研究や日本漢（文）学研究に関係ないように見えるが、さにあらず、この後（一九〇九）に起こる白鳥庫吉が提起した堯舜禹は実在の人物ではなく、天・人・地の仮託であるという“堯舜禹抹殺論”につながっていく。

この二つの論争を通して新しい研究思想と研究方法が確立していったことは、定説であるが、李慶氏はその際那珂通世たちが清朝の学者崔述の仕事『崔東壁遺書』に注目し、そこから大きな影響を受けたことを重視する。

那珂は崔東壁の仕事のどこを評価したのであるか。一九〇二年『史学雑誌』第十三編第七号に発表した「考信録解題」でそれを次のように明らかにしている。

「経伝子史百書の書を読みてその新古を鑑定し、その真偽を甄別することは、我国人に望み難き業なれば、幸に此書に頼りて其労を省くことを得べし。東壁の排斥するは、俗伝なり、偽書なり、異端邪説なり、後儒の謬解なり。その信用するは、古伝なり、古書なり。聖人の道なり。その聖人の道は暫く置き、その古書古伝に就て、更に研究を加ふることあらば、我が西隣の古代開化の真相を知るに於て、労少くして功多かるべし。故に此書は我国の史家に取りて闕くべからざる良書にして、陳履和の謂はゆる「必有真知」は、彼国には望み難けれども、その我国に行はるゝことは、何ぞ「百年之久」を待たん。」

那珂通世はこの書『崔東壁遺書』を狩野直喜から知らされ、狩野は内藤湖南から教えられたという。

李慶氏は那珂通世らに与えた本書の影響を重く見て、次のように総括した。

「日本近代の中国学の理性的批判思想は、また中国前近代の優秀な理性と批判精神からも養分を吸収した。要するに明治以後導入した大量の西洋思想が、学術研究領域に浸透し、批判精神をもつ中国学術思想・方法と結合して日本独特の新しい研究思想と方法が逐次形成されていった。」

李慶氏の言うこの時期の二つの論争と崔東壁の書（の影響）が近代的な中国学術研究の精神と方法の確立に貢献した。

四、全面ローマ字化、仮名化の主張があったこと

文明開化（近代化）が必然化させたのであろう。一八八二（明治一五）年『東洋学芸雑誌』第七号と第八号で東京大学理学部教授矢田部良吉が「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」を発表した。西周の主張を継承し、発展させたものという。三年後の一月に外山正一を会長に「羅馬学会」が発足する。これと前後して、三宅米吉によって全面仮名化を主張する雑誌『かなのまなび』が一八八三（明治一六）年に創刊されていたことも本書は教えてくれる。現在南北朝鮮では全面ハングル化が実践されている。韓国ではハングル漢字併用が新聞や学術論文では一部行われていて、漢字文化圏での全面ハングル化の困難さも示している。平仮名や片仮名が発明され漢字と併用されてきた日本での全面仮名化、またハングルと仮名の構造上のちがいもあるので、一概に比較することは許されないが、明治の十年代でのこの二つの運動は、日本でも漢字全廃、全面ハングル化に似た運動があったことをしらされて興味深い。矢田部良吉が漢字や漢文が過去に日本人に進歩をもたらしたことを認めつつ、それが日本人を「束縛圧制」し、「新思想、新言論ヲ発揮スルノ自由ヲ奪」ってきたという指摘も、日本漢文学の功罪を考える上で参考にしなければならないだろう。

上記の二、三、四のこと以外にも本書から中村正直の「漢学不可廃論」（明治二十五年五月演説）の存在を知ったことなど記すべきことはまだ沢山ある。しかし山路愛山の『孔子論』の序に次の一節があることを教えてくれたことだけは、本書評の締めとして飾らせていただきたい。

「余の信ずる所に依れば孔子は日本精神界の共有物にして而して其教訓は日本人民の遺産なり。余は日本人民が新しき智識を追求すると共に、旧き思想を保存せんことを欲す。孔子の流風餘韻は今も猶ほ吾人の社交に影響し、法律にすら影響す。吾人の祖先は孔子の遺訓に依つて教育せられ、而して吾人は此教育の中に胚胎して新しき時代に生れたり。余は此の如き思想の太祖を研究するの日本人たる読書生の義務なることを感ず。」（民友社刊）

孔子の思想に対するこのような深い理解と愛は、後に下村湖人などに見ることができるが、日本漢文学理解のために貴重である。

本書第二部からは内藤湖南と津田左右吉の中国思想理解の違いなどを問題にする価値がある。第三部の戦後篇からは狭義の日本漢文学理解のために注目するところは何もなかった。

日本漢文学理解とその研究のために本書が貢献してくれるのは第一部の明治篇である。今回書評のため一部の明治の雑誌に直接当たってみたが、ものすごい数の遺産が図書館の中に眠っていた。明治は覇気に富んだ時代であったことは、これらの厖大な文章を見て、すぐわかる。これらを直接手にとって読む必要がある。本書はこのことを教えてくれた。李慶氏に再度感謝を申しあげたい。（了）